季刊

直江の津

◉ かみえちごを考える ◉

通巻27号

秋号

2007

9,10,11月

小木航路

歴史編

「使い勝手の良いまち」づくり わがまちにLRTを

上越信用金庫上越産業振興研究所レポート

巻頭エッセイ◉このまちのこと

失われゆくものへの愛惜

——村歌のできた頃——

◉ この人に学べ ◉

各種産業組合を設立して
地域の近代を拓く

富永孝太郎

配流800年 親鸞の風景

おなかの人々と親鸞 4

【 文学の旅 】

◉ きよのさんと歩く

【江戸六百里】

【手前味噌】

◉ 上越市五智・寺町・北陸道界隈

季刊 直江の津 第27号 秋号
2007―9・10・11

目　　次

■巻頭エッセイ・このまちのこと
失われゆくものへの愛惜　成島継紀　3

■配流800年 親鸞の風景
連載6　ゐなかの人々と親鸞4　松野純孝　4

■特集
小木航路　歴史編　6

■文学の旅
“きよのさんと歩く”江戸六百里
手前味噌　中村仲蔵自伝　18

■この人に学べ　富永孝太郎　14

■カメラの眼　20

■読書びと
ひとり旅は楽し　池内 紀著　21

■建物さんぽ　22

■アルバムの一枚　30

■上越信用金庫 上越産業振興研究所レポート　24

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治11年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。



♣巻頭エッセイ
成島継紀（なりしまつぐのり）さんのこと
昭和9年3月牧村生まれ
元牧村史編さん室長　新潟県民俗学会会員
牧郷土史研究主宰
成島さんを「“牧村”の生き字引」と紹介しても異論は出ない。しかしそれだけではなく、広く地域史への探求心には、誰もが圧倒される。

失われゆくものへの愛惜
―村歌のできた頃―

成島継紀

一、白峰（しらふ）の山の連りは
　大空高く聳え立ち
　飯田の川の水清く
　眺め楽しき牧の里

二、湧き出る石油繁る木々
　山には山の幸あふれ
　五穀ゆたかに野に充（み）てる
　天恵（めぐみ）ゆたけき牧の里

大正十年（一九二一）、時の村長江口覚太郎は青少年に夢と希望を与えるべく、また誇りうる郷土意識の昂揚を図るために、村歌を構想し、当時村の青年文士と交流のあったと思われる相馬御風に依頼して作った。

いつの時代にも歌は民衆のくらしとともに生きてきた。旧牧村における大正時代は、まさに牧油田の全盛期であり、飯田川の流域を中心に、石油の湧出量も高く活気にみなぎっていた。作曲は、御風を通じて中山晋平に依頼したものではないかと、当時をよく知る横尾源七（96）の口述である。その証しとなる史料（中山晋平）はいまだに見つかっていない。

「ふるさとが消える―」こんな言葉がかわされる世の中になってしまった。余りにも寂しい現実、失われゆくもの。忘れ去られているものにもう一度スポットを当てられないものだろうか―。そんな思いの昨今である。

配流八〇〇年

親鸞の風景

●連載6

みなかの人々と親鸞4

―どんごろ―

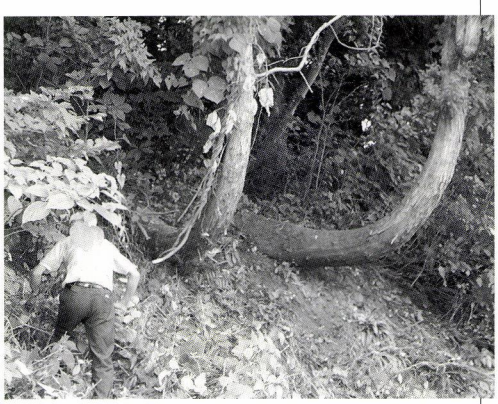
松野純孝

フランスの諺に、「都市に三代住むと家が亡びる」とある。このことは著名な生物学者の実態調査によって、そのようなケースの多いことがわかった。私の家は代々田舎であるが、大学卒業後都市に三十余年いたところ、終に四〇〇字詰め原稿一枚も書けなくなってしまった。都市では人間が生物学的意味で堕落してしまう。何代も昔から東京で生活していた清水幾太郎氏が言っている。病人の絶えたことがないというのだ。

当時、私は『教行証』の親鸞よりも、九十歳まで生き抜いた親鸞が何より有難かった。

人間の幸福論ともいうべき大経の四十八願中、第二十六願に金剛那羅延身者が見える。那羅延はインドの神で体力のすぐれた金剛力士。何よりも体力というのである。私は先輩後輩の反対を押し切って、東京からさっさと田舎に帰った。ところが半年位して、何枚でも書けるようになったのである。帰ってきたのは一九八三（昭58）年春で、この年から三年続いて上越は大変な大雪。湿気の多い大雪の重みで、杉の木が真二つに折れる。いわゆる素性のいい良材ほど惜し気もなく折れている。折れないのは、へちこ曲った木。風雪でいじめられたのである。大工さんの話では、へちこまがった木材の方が、家で雪の一番重みのかかる棟木にもってこいという。耐久力だ。私はこれだこれだと思った。木の切株のどんごろになると、囲炉裏でくべるのに中々燃えつかない。一旦燃えつくと、三晩も四晩もいぶって燃え続ける。ほかほかしてしんから温る。持続力抜群。それに比べて素性のいい良材は直ぐ燃えつくが、じきに燃え尽きてしまう。この界隈のどんごろになると、製板で直径二尺余りのぶんぶん回転している鋸の歯をも曲げてしまうというのだ。まさに金剛だ。私は大学で学生に、品行方正とかマナーがいいとかは二の次だ。まず、ぶんぶんと唸って回転し、木材を挽く直径二尺余の鋸の歯をまげてしまうどんごろ、になれ。頭より先ず馬力だ。馬力がどこまで続くかだと。

「鏡の御影」の親鸞。大地からぬくっと生え出たような



撮影協力・牧区今清水中島篤栄さん

風貌。笹ヶ峰から上は樹木は白骨のように立ち枯れている。その笹ヶ峰に三抱えも四抱えもある節だらけの水楢に、妻恵信が重なった。親鸞と恵信はまさにどんごろといっていい。

そういえば、親鸞面授の門弟達もそうだった。最近、重要文化財になった高田専修寺の顕智の木像も不屈の面貌でどんごろだ。彼は越後の生れといわれている。彼のリーダーで、親鸞の全門弟の代表格ともいうべき結城市称名寺の真仏、踏みつけられても痛くないといった面だまだ。同じく代表格の双璧、性信。生来豪傑勇猛で七十五人力の力の持ち主で悪太郎といわれていたという。茨城県水海道市報恩寺の坐像並びに群馬県板倉町宝福寺の坐像。後者の方は延文六年（一三六一）二月十八日、三度目の彩色修復したとある。また東京麻布善福寺の開基とされる了海もそうだ。みんな踏みつけられても痛くないといった面相だ。

イエスの弟子ペテロ。彼は漁師の子で、自慢こきで、よくイエスにたしなめられていたという。ペテロの語源は巌といわれ、まさに巌のような面貌。私は東京国立博物館でキリスト教展を参観したとき、ペテロの古い絵像があった。まさしく巌のようで、それこそ踏みつけられても痛くないといったものだった。イエスのキリスト教は信者の総数では世界第一の世界宗教となったが、その原動力はまずこのペテロであったにちがいない。

吉川英治さんは、「私はなぜ時代小説を書くか」と題して次のように言う。文化の花が爛漫と咲き誇った絶頂期、しかしこれを生命力の上から見ると、この時こそ文化の最も危い時だと私は考える。その生命力が弱っているに違いないからである。そこで私は「よし俺は野性を書かう」と。野性というものを失ったら人間の衰えと考えるからだ。時代小説でこの野性を書こうというのだ。或る時、吉川さんは植物学の雑誌を読んでいるうち、文化的に見て面白いと思うことを発見した。優良種の葡萄も或る時期が来るといいものが出来なくなる。実が萎びて来てしまい、いじけた皺だらけのものに退化する。衰えてゆく葡萄を再び若返らせるために、その優良ぶどうの木を二、三本置きに抜いて捨て、そのあとへ山野に生きている野生のものを植えた。ところが、萎びていじけてしまった優良葡萄が、その翌年から再び瑠璃玉のようにみずみずしい、ハチ切れるような葡萄になってきたというのだ。野性である。私は実に貴重な話と思っている。野性こそ、人間、文化の根源力だと思う。

親鸞は『教行証』化身土巻で、大地の精気、衆生の精気、仏法の精気。この三つの精気の久住増長を繰り返し述べている。この三精気によって和暢にして豊かな世界になることをうたっている。大地の精気によって衆生の精気、衆生の精気によって正法の精気。つまり何よりも先ず大地の精気なのだ。

親鸞の門弟達は二十歳前後のゐなかの青年だった。生意気盛りで非常識な若人。兼好がこのような若き者を「若き時は、血気、うちにあまり、心、物に動きて、精欲多し」と、「友とするにわろき者」の一つに数えている。親鸞は逆だった。ばか酒を飲み、女の後を追いかける。血気うちに余る若者たち。彼等にひとたび念仏の他力信心の火が燃えつくとまさに鬼に金棒だった。やがて同朋同行は万を超え、道場が諸処に建てられていった。

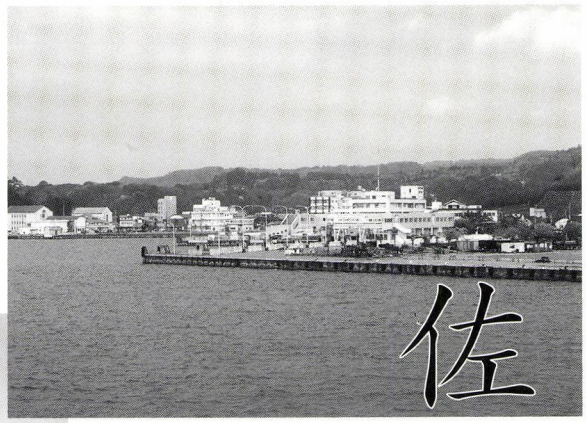
仏教学者／上越教育大学名誉教授・元学長　上越市牧区東松ノ木・一念寺

特集

小木航路

歴史編

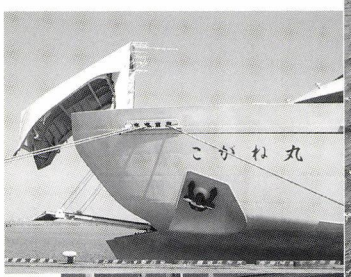
佐渡へ 佐渡へと 草木もなびく



小木港



かもめが見送る直江津港





手を振って見送る佐渡汽船の人達



下船を待つ子ども達

尾崎紅葉が赤倉温泉の宿から爪先立つようにして、

口あいて佐渡が見ゆると涼み鳧（けり）

と詠み、与謝野晶子も同じ宿から、

佐渡が島海も御空のものとなり
やがて山なみ黒雲となる

と詠った佐渡。

今、佐渡では、世界各地のアーティストも参加して、小木地区を中心に開かれるアース・セレブレーションは二十年を迎え、「地球の祝祭」を祝う人たちが年々増えている。また、自然や民俗の多様性、独自性が注目され、「日本のバリ島」と呼ぶ人たちも現れて、佐渡の民俗に触れようと海峡を渡る人も多い。これらは、金山・たらい舟・尖閣湾の奇観などという、従来のバスを連ねる佐渡観光とは違う、佐渡の新しい魅力に光が当たりつつあると言ってよいであろう。

しかし、渡海する観光客が年々減少しているのが現状である。

対岸が県都新潟であり、ビジネスを含む生活航路としての側面が大きい両津航路に比べ、乗船客のほとんどを観光客で占める小木航路は、観光客が減少すれば減便または廃止の危機に立たされるのは当然であろう。ただ、小木航路の存廃は、単なる一航路の経済性の問題では済まない。ましてや「海の国道三五〇号？」というクイズ問題が消滅するというような問題でもない。海峡を挟む「人」の交流の危機を示すものである。

また、北陸新幹線が開通すれば、関東・関西からの佐渡観光の窓口として、小木航路の重要性が増大すると強調しても、「直江津から小木へ渡る佐渡の魅力」を対岸のわれわれがアピールしなければ、直江津港は単なる通過点に過ぎないであろう。

今回は本誌の趣旨として、まず小木航路の歴史を掘り起こしてみた。合わせて、あまり知られていない小木周辺の魅力も紹介する。

小木航路の歴史

小木湊

古く、本土から佐渡への公の航路は寺泊から松ヶ崎（畑野）であった。流罪の順徳上皇や日蓮、世阿弥が上陸したところである。

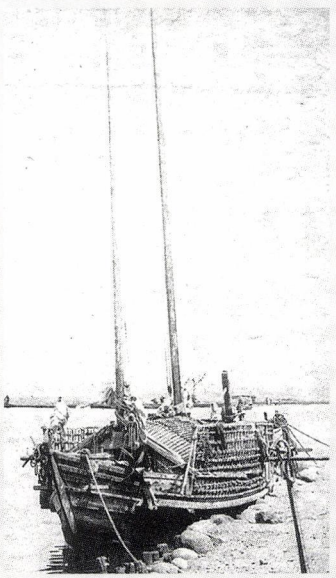
小木は城山を中心にして外の澗（ま）（現在の佐渡汽船岸壁のある側　西風・南風に強い）と、内の澗（東風・北風に強い）があり、風向きによってどちらにも避難できる良港であったが、島内への交通が不便であったため、松ヶ崎や赤泊が島への渡航の湊として開かれていた。その小木が湊として歴史に登場するのは、佐渡金山奉行大久保長安によって金の積出港として開港されてからである。

その後、寛文十二年（一六七二）、河村瑞賢によって西回り航路の寄港地に指定され、越後の御城米（幕府直轄領の年貢米）を小木に集め、北前船に積み替える中継基地として千石船が大量に入港するようになる。また、天領や藩米が集中する新潟湊は河口が浅いため、入港の順番待ちの港としても多くの北前船が舳先を並べることになった。

小木の町は、このような船の船頭衆が泊まる問屋、船員を泊める付船宿、歓楽街などで島内随一の賑わいをみせることになった。

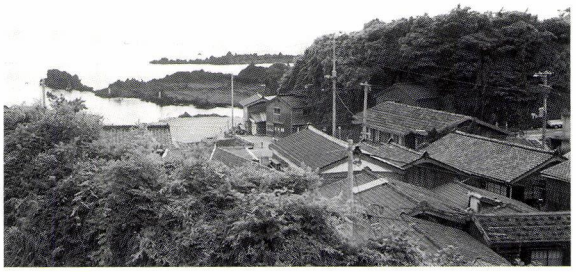
そのなかで、越後の官米を小木に運んで財を成した宿根木の廻船業者は、大型の廻船を建造して松前から大阪まで交易するようになった。十九世紀初頭には廻船持ちの村として、佐渡の富の三分の一が宿根木に集まるとまで言われた。

明治維新によって廻船業者の特権的権益が失われると、小木の繁栄も往時の賑わいも薄れて衰退の道をたどることになるが、決定的に中継港としての地位を失うのは、汽船の出現によって船足が飛躍的にのびたことと、明治新政府によって新潟が開港され、入港待ちや非難用の補助港として夷湊（両津港）が指定されたことがあげられる。



直江津港に停泊する千石船
明治時代

廻船で栄えた宿根木
入江の中には文化財
に指定された家並が
見える





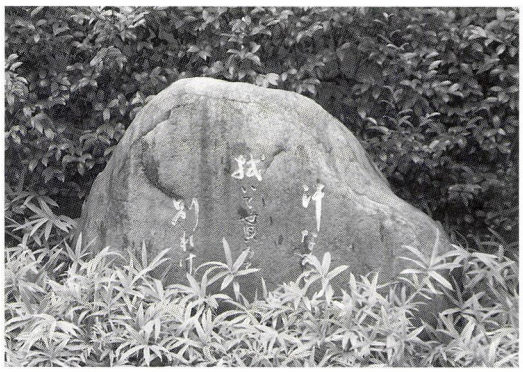
昭和36年まで現役だった「幸丸」
小木海運資料館

小木外の澗
今は漁港として賑う
前方は城山





小木の神社に奉納される船絵馬



汗なんど
拭いて貰うて
別れけり

尾崎紅葉が「煙霞療養」の旅で、小木の芸妓お糸のために詠んだ句

明治四年、夷湊に停泊する外国船の連絡用に新潟丸（六四トン）が夷湊で建造され就航した。この船はイギリスの技術指導で、日本で初めて建造された鉄鋼製蒸気船である。

越佐航路

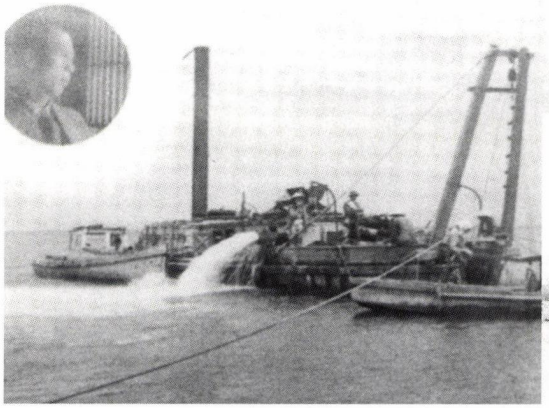
明治十四年、越佐間に近代的な航路を開こうと、小木と出雲崎の有志で出雲崎渡船会社を設立して、占魁丸（四八トン）を就航させたが、十八年に越佐汽船会社が設立され、新潟・夷間に定期船が就航すると、地の利を得て乗船客を増やし、小木・出雲崎航路はしばしば欠航するようになり、航路の廃絶に至った。

直江津から佐渡へ

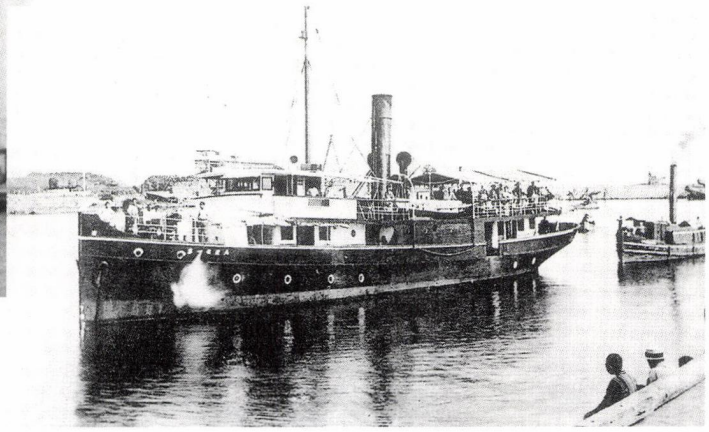
直江津・佐渡航路は、明治十五年、寺泊・多田（畑野）間に就航していた高田丸が沢根（佐和田）に入港し、貨客を直江津へ航送するようになったのが始まりといわれている。しかし短期間で廃航している。

明治二十五年、御代島丸が佐渡金山の鉱石を積んで沢根から入港し、ようやく直江津・小木・沢根間に定期航路（隔日就航）が開設された。冬季間の風浪によって十一月から三月までは休航し、実質的には七ケ月の就航であったが、関西方面の貨客が直江津を経由するという利点や、二十六年の信越線上野・直江津間の全通によって、佐渡の物産の移入だけではなく旅客も好調で、越佐航路のみならず直江津港も順調に実績を伸ばしていった。

このような景況を見た越佐汽船会社は、新潟・夷間で実績をあげた余勢を駆って直江



河口を浚渫する



荒川（関川）河口から出航する佐渡丸
大正九年に河口が改修され接岸できるようになった

津・小木航路へ参入し、ついには越佐航路全体を占有するようになった。この独走に数社が挑戦を試みたが失敗に終っていった。

この専横ぶりを阻止しようと本格的に立ち上がったのが、両津の本間金五郎、沢根の青野泰助、直江津の古川長四郎であった。

三人は有志とともに、明治四十四年、国東丸（九八トン）を佐渡商業組合の委託を受けて、新潟・夷に就航させ、大正二年二月には、佐渡全島的支持のもと資本金十五万円で佐渡商船株式会社を設立した。

佐渡商船会社は翌年、最新鋭の汽船、第一佐渡丸（一七二トン）、第二佐渡丸（一七九トン）を造船、第一佐渡丸を新潟・夷間に、第二佐渡丸を直江津・小木・沢根に就航させた。

所有する船が百トン未満の越佐汽船会社の劣勢は明らかで、同社は最低運賃（五〇銭）の網の目をかいくぐって「乗船切符の半額以上を割り戻すリベート策」（ポケット社史・佐渡汽船）に打って出たため、佐渡商船会社も同様な対抗策に出、両社ともに経営の危機に瀕する状態になった。大正四年の第一次世界大戦の勃発は、海運業界に空前の好況をもたらし、その波に乗った両社の争いはますます激化し、一歩も引かない競争を展開することになった。

直江津の港湾開発に尽力した宮崎久雄は、当時の思い出を次のように語っている。

「相手の会社を潰さんきゃならん、せって、競争が激しくなった。船に乗ると番傘一本くれるんだ。今でいうサービスかね。そうして自分たちの船にいっぱい乗せて相手を潰そうと言うんだ」（「古老が語る直江津の昔」）

おけさ柿を育てた人

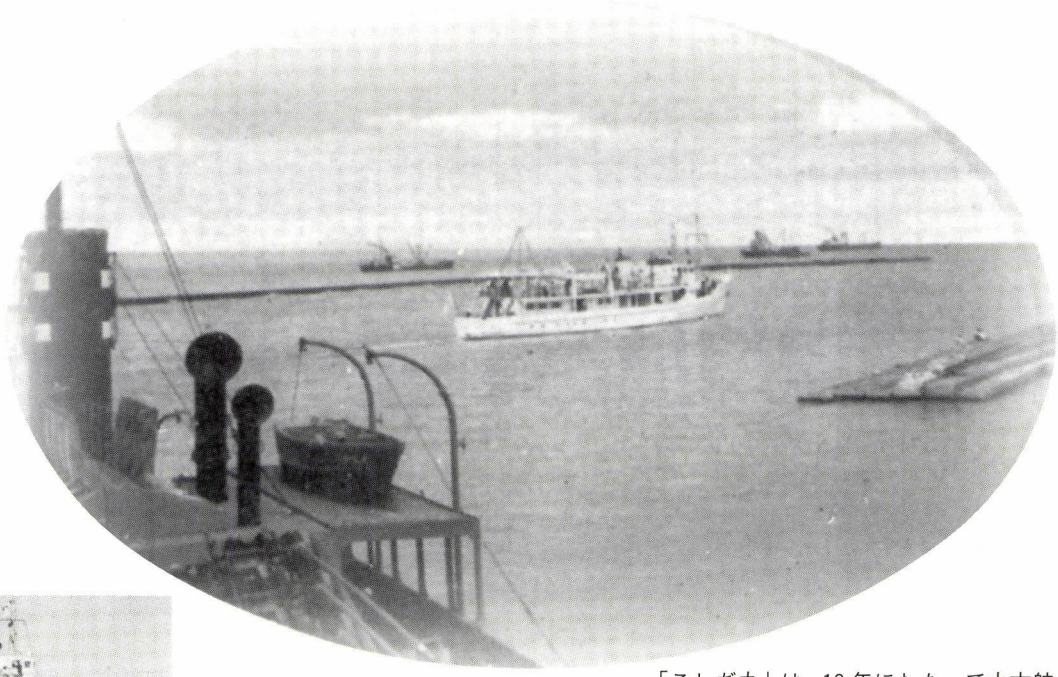
アルコールなどで渋を抜いた種のない柿で、ぽったりとした食感の「おけさ柿」は、新潟県の統一ブランド名の特産品として全国に出荷されている。

おけさ柿の発祥の地は佐渡の羽茂だが、栽培技術指導に生涯を捧げたのが、浦川原区猪子田出身の杉田清である。

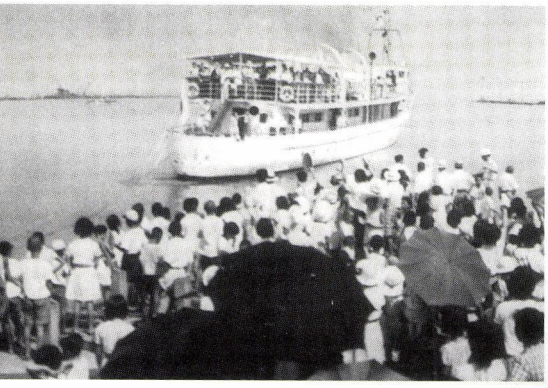
羽茂村農会に農業技術者として赴任した杉田は、羽茂が古くから柿の産地であることに着目し、県の指導を振り切って昭和七年、庄内から八珍柿の苗木を買い入れ、五年の歳月をかけて出荷にこぎつけた。

この柿は、新潟県から買い入れた苗木の中に、突然変異の種無し種を発見した庄内の人が、接木で増やしたものである。杉田がそれを里帰りさせたのである。

杉田は、水稲農林1号の生みの親、並川成資を顕彰する第一回川並賞を受賞、黄綬褒章受章、羽茂名誉町民に推されたが、生涯農業指導員を貫き、八九歳の人生を羽茂に終えた。



「こしぢ丸」は、10年にわたって小木航路に就航し、地元の多くの観光パンフレットに、スマートな船体が載っていた
昭和35年当時は片道、2等560円、3等280円だった

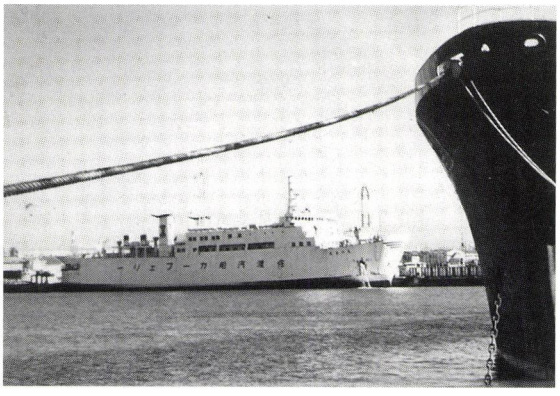


見送るのは古城小学校の子ども達



おけさ丸　488トン
昭和40年当時の港の賑いが分かる一枚だ





カーフェリーえつさ丸

佐渡汽船の発足

元号が昭和に改まると、無益な競争を憂慮するとともに航路の重要性を鑑み、県営化への機運が起こってきた。

昭和七年四月、曲折の末、佐渡商船会社が他の二社を買収する形で、県が株式の五十



こがね丸

こさど丸



パーセントを所有する佐渡汽船株式会社が発足し、古川長四郎が社長に就任した。

小木航路

直江津・小木航路は、昭和九年には小木直行となり観光客も増加し、順調に推移したが、第二次世界大戦に突入すると、十七年には二日おきに一往復、十九年五月になるとついに休航に追い込まれた。

終戦の翌年、二十二年には早くも再開されたが、燃料不足で再び休航、ようやく二十四年、みゆき丸（六七トン）の就航をみたが、柏崎経由隔日運行という、直江津にとっては不満なものであった。

二十七年、直行・毎日運航が決定され、五月から九月までの就航であったが、八月二日、待望のこしぢ丸（二七六トン）が就航した。スマートな船体のこしぢ丸は、小木航路で長く親しまれることになるが、かつては旧海軍の飛行機救難艇で、戦後は米海軍に接収されフライアンス号と呼ばれていた。朝鮮戦争の休戦に伴い売りに出され、佐渡汽船が購入したものである。新潟鉄工所で改装され、公募により「こしぢ丸」と命名された。

購入にあたって旧直江津町などから一千万円の融資を受けている。（ポケット社史・佐渡汽船）

その後こしぢ丸は三十六年、九州商船に売却された。以降、こがね丸・おけさ丸の時代が続き、昭和四十五年五月、みゆき丸の就航で小木航路もカーフェリーの時代を迎える。

現在、こさど丸（三九六五トン・旅客一〇〇〇人・乗用車一六四台）と、こがね丸（四二五八トン・旅客一一三三人・乗用車一五一台）が就航している。

（参考　ポケット社史・佐渡汽船）

小木航路の活性にむけて

平成３年のピーク時に比べほぼ半数に減少している小木航路の活性化を図るために「小木直江津航路のあり方検討会議」が国・県・佐渡・上越市により設置され、利用客の増加策、佐渡汽船の経営合理化、県・佐渡・上越市による経済支援などが報告されている。

上越市独自の活性化会議も発足し、佐渡市と「集客プロモーションパートナー都市協定」を締結し、広域観光振興の取組みが開始された。また、生涯学習団体などの佐渡市民とのスポーツ・文化交流へのフェリー代の補助、児童・生徒の体験学習・子ども会・親子旅行の補助制度も創設され、地域交流の航路としての位置づけが始まっている。

上越商工会議所婦人部会では、2時間30分という乗船時間の有効活用によって、船旅の魅力の掘り起こしに乗り出している。

フェリー代の補助などについては、直江津サテライトにある直江津港振興課で受け付けている。

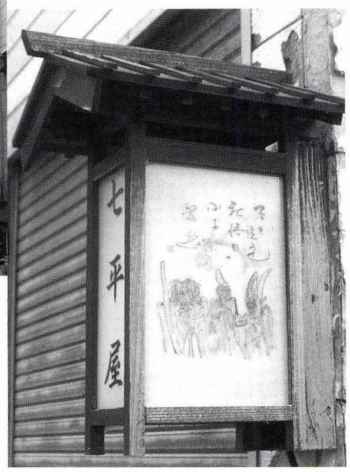
直江津地区の活性化のためにも、じかに出向いてほしい。


市街地に出た直江津港振興課

佐渡の旅は小木から

誰も書かなかった小木の魅力





軒先には行灯が。俳画や俳句、おけさの文句が書かれ、明りが灯れば風情たっぷり。裏道風だが夜になるとスナックや居酒屋、寿司屋に活気がもどる。居酒屋は安いうえに量が多い。

直江津からフェリーで二時間半。佐渡おけさの軽快なメロディが船内に流れると、佐渡の玄関口の一つ小木港に到着。正面に山、左手に城山を従え、船は緑に囲まれた入り江へ滑り込んでいく。

佐渡には両津、赤泊、小木と三つの港があるが、中でも直江津と小木を結ぶ小木航路利用者の八〇パーセント近くは観光客だという。

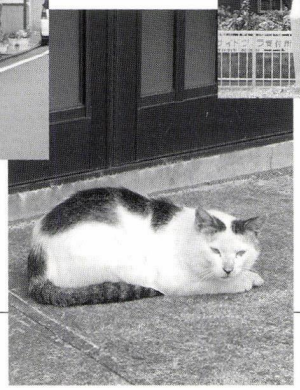
そういえば四月の島開きの頃から夏の観光シーズンは名古屋、京都、大阪からの観光客が多く、船内では関西弁が飛び交っている。関西からは高速道路の便が良いので、小木航路は大変便利である。

小木へ着いたら、通常はここから車に乗り込み、小佐渡の観光名所の一つ、千石船の集落・宿根木や名勝・矢島経島へ行くのだが、その前に、ぜひ港へ車を止めて小木のまちを歩いてほしい。ガイドブックではクローズアップされていないが、大変面白いまちだ。

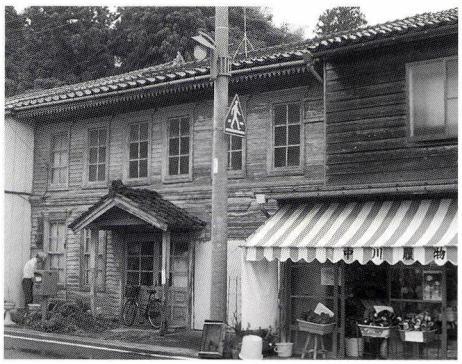


懐かしい店構えの酒屋。通りが斜めになっているので、店先も道にあわせている。

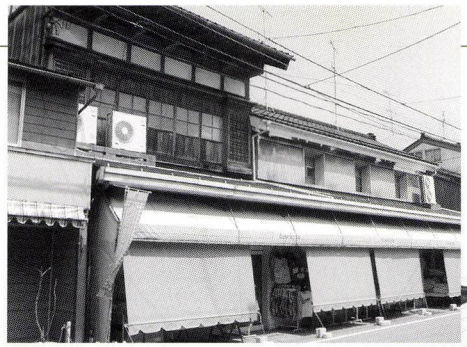




港町に猫はつきもの。車がきてもなんのその。我が物顔で通りを歩いていく。

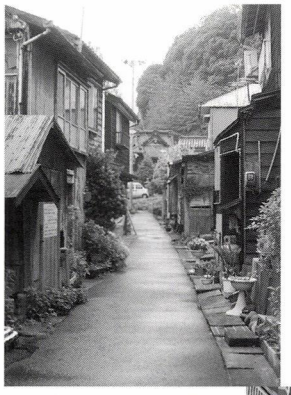


商店街の真ん中にある郵便局。今はポストだけが使われている。往時の賑わいを髣髴とさせる建物だ。

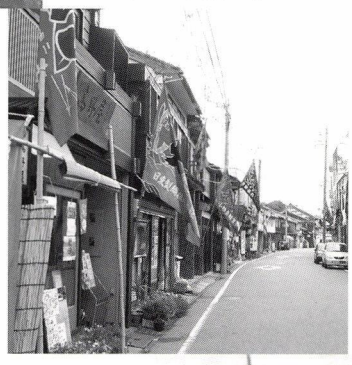




右は、どんどん積み上げていった木造５階建て、登録有形文化財指定の旅館。上は、間口が５、６間はある呉服屋だが、今はなんでも揃う洋品店。店の半分が漆喰の土蔵造りという豪華な店。その昔、歓楽街があり芸妓さんが多かったからか、小木には呉服屋が多い。



大漁旗を飾り、アース・セレブレーションを迎える町並み。海外からの観客と商店の老主人が対等にやりあうのも面白い。



つき当たりの阿弥陀院へと続く道。小木のまちは海を背にして山になっているので、歩くと坂道が多いことに気づく。

どこが面白いのか―、小木は今やほとんどの都市が失ってしまった、歩いて回れるまちなのである。通りは小木港のある外の澗と内の澗の間に、弓なりに大きく走り、両端に木崎神社と金比羅神社が守っている。

両津の商店街はシャッター街化しているが、小木の商店街はスーパーもありながら、肉屋、魚屋、花屋、薬屋、酒屋、本屋も健在だ。江戸時代から続く蕎麦屋もある。家々は間口が狭く奥へと続く鰻の寝床式。店の間があって茶の間が続き、横には走りが裏まで続いていく、いわゆる町家の形式だ。

作家・池波正太郎は「京都には、東京が失った川や橋や家並や鳥の声も、今もわずかに温存している」というようなことをエッセイで書いていた。しかし今や京都も随分と変わり、観光客には容易に見ることができない、例えば西陣の奥でひっそりと守り伝えているような、古のまちの香りや人の暮らしが小木には残っていて、江戸や京都、あるいは、昔はどの都市にもあったまちの姿を垣間見ることができる。

とにかく、ゆっくりとした、まぼろしのような空気が流れながらも、人がそこで確かに暮らしているという、活気のある不思議なまちなのだ。

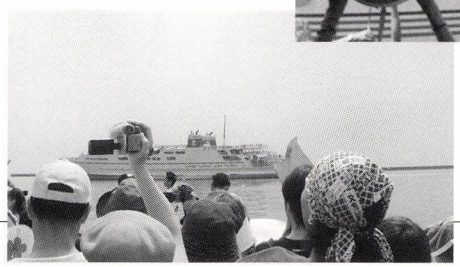
宿根木へ行くにも、金山や尖閣湾へ行くにも小木港からだと、車は田園地帯や海岸沿いを行くので眺めが抜群によい。

佐渡の魅力をより一層感じるには、まず小木のまちを堪能してから入るのが、おすすめである。

佐藤和佳子・フリーライター



アース・セレブレーション終了の翌朝、鼓童のメンバーによる「送り太鼓」が名物。そのために休暇を一日延ばして小木航路を利用する人、今年は送る側に回りたいと一便遅らせる人も。



船が傾きそうだがサービスに旋回してくれる。



富永孝太郎

各種産業組合を設立し地域の近代を拓く

40歳代の富永孝太郎・郡農会長時代
明治41年刊「新潟県官民肖像録」より



昔の面影を残す富永邸への道

生い立ち

慶応二年（一八六六）、富永孝太郎は中頸城郡神田原山（三和区）に誕生した。

「神田の富永」と言えば上越では知らぬ者はないというほどの素封家であった。

幸太郎の曾祖父の仙八は、眼科の名医として知られ、江戸からもはるばる診察を受けにやって来る患者もいたという。

また、文才にも優れ無物道人と号し、江戸へ上る途中の宿場の様子を記録した東都道中紀行『吾嬬紀行』も著している。

以来、富永家では仙八を襲名し、眼科医を継いでいる。

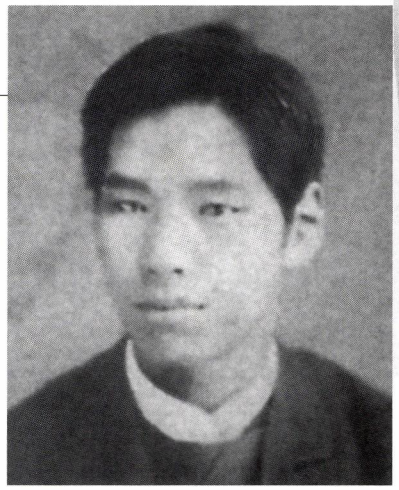
二代仙八も春部の号で歌人として名を知られ、「竹村」と号し南画もよくした。長崎に旅した記録『諸国郡郷考』を著すなど、多才ぶりを発揮している。

幸太郎の父、三代仙八は産業開発に意を注ぎ、養蚕の振興、石油の開発などを手がけている。

富永家は時局にも敏感で、勤皇の志士などを逗留させたり資金を与えているが、頼山陽の子、頼三樹三郎もその一人で、富永家に逗留して書を残している。

孝太郎は幼少にあって、百間町の漢学者、井部健斎の「温故知新塾」（温知塾）に学び、上京後、明治二十二年、青雲の志を抱いてアメリカのイリノイ大学農学部に入学した。頸城の地から遥か彼方のアメリカへ留学しようという大いなる決断については、彼の口から語られることはほとんどなかった。

大学では農業学や農業技術を学び、卒業後はアメリカ西部各州を巡って開拓精神を感じ





右　無物道人が著した
「吾嬬紀行」
左　渡米前の孝太郎

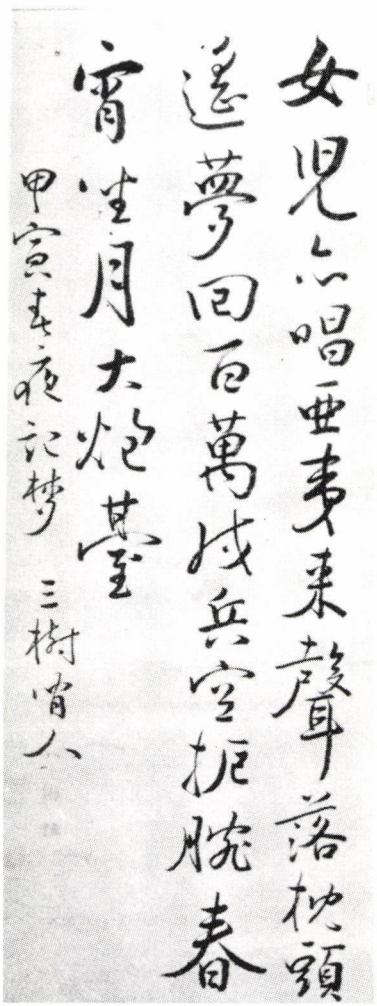
取り、六年の留学を終えて帰国した。

当時の日本は、農業経営や農業技術に対する知識など、近代農業への考え方がまだ進んでいなかった。

帰国した孝太郎は官途に就かず、技術向上、経営改善は近代地主としての責務であると考え、郷里の農業発展に尽くす道を選んだ。孝太郎の考えの基底には、農村を含めた社会の生活水準の向上は、国の利益に通ずるという「国利民福」があった。

信用組合・産業組合の設立

明治三十三年、「産業組合法」が公布された。産業組合設置のねらいは、中産階級を主たる対象とし、金融の途を開いて生産性の向上を図り、経済力を強化するとともに地方自治を振興させることにあった。



頼三樹三郎の書
富永家で詠んだ七絶詩
（「頸城と書」より）

組合には、信用組合、販売組合、購買組合および生産組合の四種類があった。

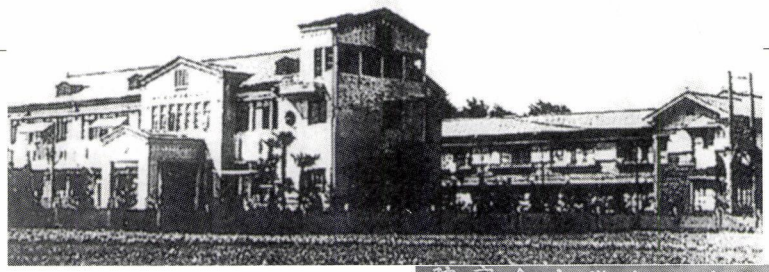
孝太郎は明治三十九年、自ら美守村に「至誠信用組合」を設立するとともに、上越各地を産業組合設立の必要性を説いて回った。その結果、郡内各地で組合の設立が進み、県下の産業組合の先進地と注目されるまでになった。

四十四年には、上越信用組合連合会を設立して自らその会長に就任した。

高田の和田憲太郎は、孝太郎の強力な勧めで、大正四年、高田信用金庫（現上越信用金庫）の前身、高田力行信用組合を創業している。同時に孝太郎も世話役に就いた。

大正十年（一九二一）、上越信用組合連合会、中越連合会、中蒲原信連、北蒲原信連および南蒲原信連を統合して新潟県信用組合連合会を設立させた。初代会長には高橋九郎を推し、続いて二代会長に就任すると、以降二〇年の長きにわたり、県下の産業組合事業の基礎を固めた。

大正十三年、中頸城郡内の直江津・高田・新井の三か所に農業倉庫組合を設立して、自





上　昭和30年代の上越病院
下　創立間もない頃の病院正面と看護婦（「アルバム直江津」）より）

らは直江津農業倉庫組合長に就任し、米穀共同販売制の基礎づくりに寄与した。

戦争中これらの農業倉庫があったことによって、政府供出米の保管、配給制を実施することができたと、識者は孝太郎の功績を指摘している。

昭和七年には、畜産事業の振興のために家畜保険組合の設立に尽力している。

昭和十二年、頸城三郡の産業組合による上越医療購買組合連合会を設立させ、上越総合病院の前身である上越医療組合連合会病院を開き、農村医療事業の普及を図った。

戦時中、産業組合は全員加入制が施かれると、行政的団体の性格を強め、さらに十八年の「農業団体法」により産業組合・農会など五団体を統合して「農業会」が設置され、国策の推進を担うことになった。

戦後、「農業協同組合法」によって「農業協同組合」が生れたが、これらに迅速に対応できたのは産業組合という下地があったからにほかならない。

中央進出の足跡

孝太郎は中央との連携を図り、広い視野で活動を展開した。産業組合について見れば、産業組合中央会の設立に参画し、産業組合中央金庫評議委員を歴任している。

大正九年、衆議院議員に当選し二期務めた。東京に在っては、進んで郷里の人々を宿舎に招いては時局について語った。

日本葡萄酒株式会社の設立

孝太郎の妻イトは、岩の原葡萄園を創業した川上善兵衛の妹である。共に郷土の農業発展に強い関心を持つ孝太郎と善兵衛は、明治三十六年、孝太郎が取締役社長、善兵衛を相談役として資本金五万円で、岩の原ワインの販売会社「日本葡萄酒株式会社」を設立し、本店は高田に置き、支店を東京神田旅籠町に置いた。

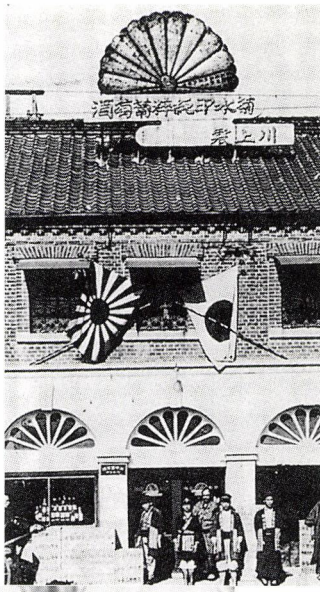
日露戦争勃発で軍からの大量注文もあり、好調なスタートを切ったが、戦争が終結すると景気が後退し、明治四十二年、全国展開を

始めた葡萄酒販売の幕を引かざるを得なかった。

号「穆堂」に寄せて

孝太郎は、身長五尺四、五寸（一六五センチ程度）、豊満なタイプであり、温厚篤実な村夫子という風貌であった。

号を「穆堂（ぼくどう）」と称した。「穆」とは、「和ぐ、謹む、麗わし、静に思う、喜ばせる」という意味である。偏の「禾」は「種、稼、積、穣、穣」など、大地に根ざした実りを現し、自身の生き方や理想の姿を表そうとしたものであろう。



右　東京神田にあった日本葡萄酒㈱の支店（「高田摘誌」より）
下　旧上越総合病院の構内にあった孝太郎の胸像



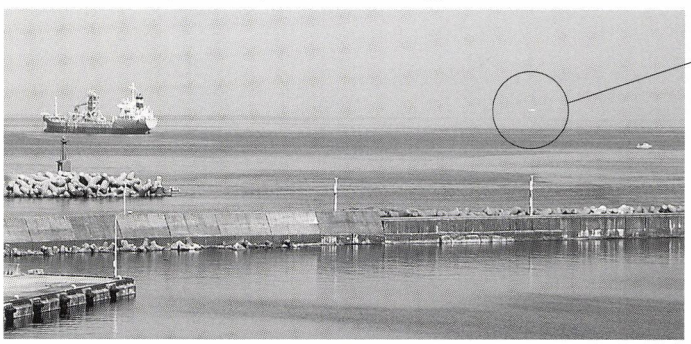
昭和二十年十月八日没、享年七十八歳。

昭和三十八年、上越厚生農協連合会は連合会解散に際し、孝太郎の遺徳を顕彰し、県厚生農協連合会上越病院の構内に胸像を建立した。

本稿は、元上越市史編さん委員村山和夫氏が他誌のために執筆したものを、筆者の了解を得て編集部で一部改稿したものである。

参考
「富永孝太郎小伝－国利民福の事蹟を中心に」
「三和村史紀要　第一集」三和村史編さん委員会　平成十一年　村山和夫
「高田摘誌」村山和夫　北越出版

直江津沖に現れた蜃気楼





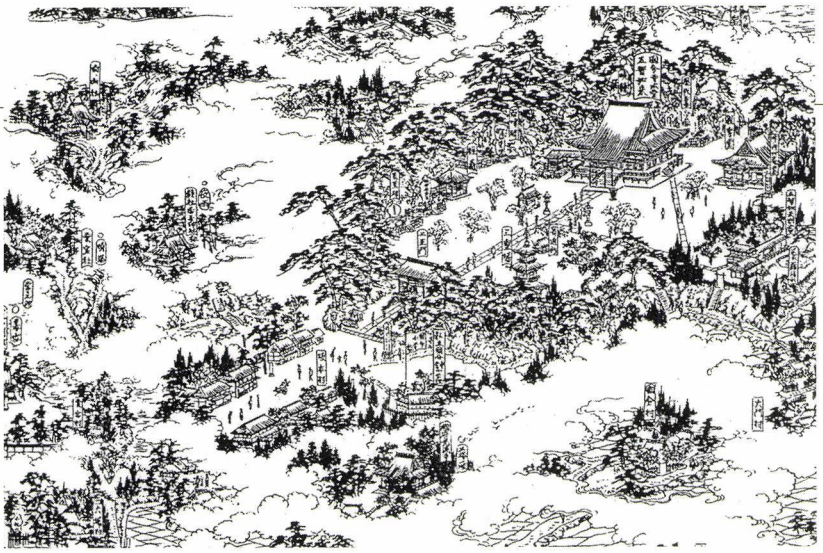
平成19年8月13日午前9時30分頃、佐渡汽船ターミナル展望台から撮影。上の写真の右端、ポールの上の白い点が蜃気楼。右の写真は部分を拡大したもの。汽船が宙に浮いたように見える。右下はプレジャーボート。

文学の旅

五智・寺町・北陸道界隈　上越市

〝きよのさんと歩く〟江戸六百里

手前味噌　中村仲蔵自伝



五智遊覧図
国分寺門前に茶店が並んでいる

文化十四年（一八一七）三月、羽州鶴岡（山形県鶴岡）を立ち、一〇八日、六百里、二三五二キロの旅をした人がいる。

その人は三井清野、三一歳。三井家は庄内藩屈指の商家である。

最近では、江戸中期以降は空前の旅行ブームだったと言われているが、今までの教科書で知り得た江戸時代は、重苦しい封建社会の下、女の旅など想像もできないことであった。

しかし、清野の「旅日記」を読むと、執事役の男と下僕を連れた、大盤ぶるまいの旅であったことが分る。

この「旅日記」に、同時期の旅日記や史料を付して「〝きよのさん〟と歩く江戸六百里」と題して出版された。

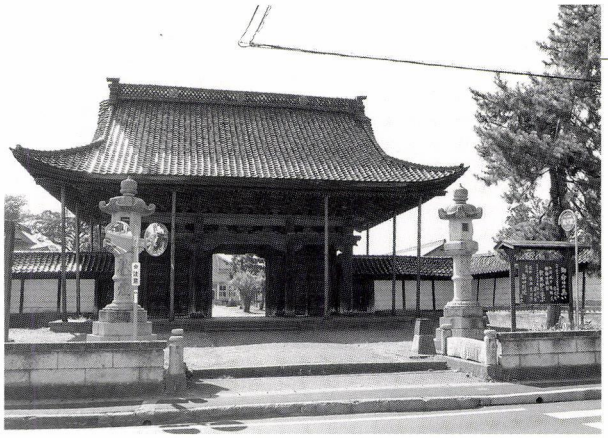
日記の内容は、茶店の団子、宿の料理の良し悪し、宿の評価、道中の名物は必ず食べて批評、神社仏閣の拝観料やガイド料、宿場の遊女、飯盛り女の品定めまで、こと細かく記録している。「えーっ、これが江戸時代？」と、イメージを一新させることばかりである。

女だてら（？）に昼食にちょっと一杯、宿では遊女を揚げて見物、果てはゲーム感覚で関所抜けまでやってのける。とても大店の貞淑な夫人とは思えないふるまいである。

清野の旅の目的は伊勢参りなのだが、道中、早くも寄り道して日光見物、江戸では芝居や吉原見物、庄内藩邸の見学までしている。そして買い物の日々で十三泊の長逗留となった。

ようやく伊勢参拝を終えると、定番の奈良・大阪・堺・京都見物へと足をのばす。京都では取引先の番頭に案内をさせ、有名料亭での食事、大量のみやげ物を買い込んでは発送する。旅費の不足は取引先で借金し、為替で決済という方法も使う。

いよいよ帰路の北陸路。吉崎御坊で「肉付の面」を見、金沢で遊びながら、八月十日（陽暦、以下同）、能生で白苧の紬を買う。



上越最大級の山門　東本願寺高田別院

信州の坂城や上田紬よりも丈夫だと評判だったようだ。この日は名立泊。

翌十一日の日記には、次のように記されている。

居多の浜、親鸞聖人の日の丸の御名号あり。片葉の葦あり。百文にて開帳。五智にて飯を食い、五智如来様に参る。大仏、五体なり。

御開山さま御木像・お御堂、百文。

それより高田。入口にて饅頭を買う。一つ二文なり。又うぢ瓜あり、随分旨し。それより町に入り、茶屋にてむきを食い…。

「御開山さま御木像・お御堂」とは、光源寺か今の国府別院であろう。五智でどんな昼飯を食べたのであろうか。饅頭は名物「景勝団子」かも知れない。土橋のあたりに店があったという。「むき」は庄内地方の「むきそば」のことで、殻を剥いた蕎麦の実（そば米）を茹でて、たっぷりの汁をかけて食べる。「うぢ瓜」は、うち瓜（庄内地方の方言か）で、まくわ瓜のことである。高田では、あちこちで瓜が作られていた。

一行は高田を通過して、当然のように善光寺参りに向う。

八月十五日、関山から再び高田に入り「高田茶屋」という茶店で名物の蕎麦を食べる。「これまでの一番なり」と記している。熱心な門徒の清野は、高田御坊の西と東へお参りする。高田御坊とは高田別院を言うが、西はどこを指すのか。



追分け地蔵（上越市藤巻）
左は清野が来た北国街道
右へ曲がれば仲蔵が歩いた今町

清野の旅の二十五年後、天保十三年（一八四二）の早春、歌舞伎役者三代目中村仲蔵は富山へ興行に向う途中、高田を通過している。仲蔵の自伝「手前味噌」によると、雁木や名物の毛抜屋を見ながら寺町の寺を詣でている。

高田の御堂立派なり。この門前にて中食。この時の菜に、烏賊の丸煮を二つ皿へ盛て出す。烏賊の丸煮とは珍しとて喰て見ると、噛むごとに腸墨とも一所に飛び出し、口の端まで真黒にするようなれど、味は滅法に美味し、代を聞けば、一皿十二文。

仲蔵は今町で一泊し、船で富山へ向う。「高田の御堂」も高田別院のことであろう。健啖家の清野は「烏賊の丸煮」を食べなかったのだろうか。

清野は預けておいた旅の荷物を受け取り、春日新田で昼食、この日は黒井の「くまくら平十郎」方にて百五十文で一泊。翌日は砂に足を取られながら柿崎着。浄福寺で百文出して「川越の御名号」を拝み、柏崎へと向う。

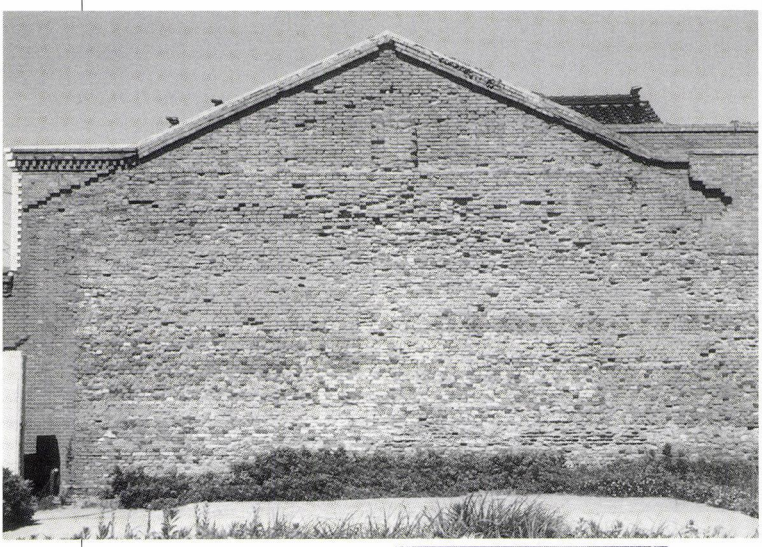
さらに旅を続け八月二十三日、一〇八日間の旅を無事終える。

二人の旅人は、この土地で、日記には書かなかったどんな風景を見て、旅立ったのだろうか。

〃きよのさん〃と歩く江戸六百里　金森敦子著
バジリコ株式会社刊
手前味噌　中村仲蔵自伝　日本演劇文献集成第一
現在入手困難

崩壊の壁

カメラの眼









平成十九年新潟県中越沖地震

七月十六日午前十時十三分、震度六弱の揺れが起きた。まだ記憶も新しい中越地震以上の揺れに戦慄が走った。

震源は日本海、上中越沖の海底十キロ、マグニチュード六・六、柏崎・刈羽を中心に甚大な被害をもたらし、柏崎刈羽原発も深刻な被害を受けた。

上越市では、柿崎区・吉川区・三和区に被害が集中し、負傷者や家屋の倒壊、水道の断水が発生した。

写真は、直江津地区の通称「ライオンの家」で知られる高達回漕店の防火壁が崩壊した現場である。

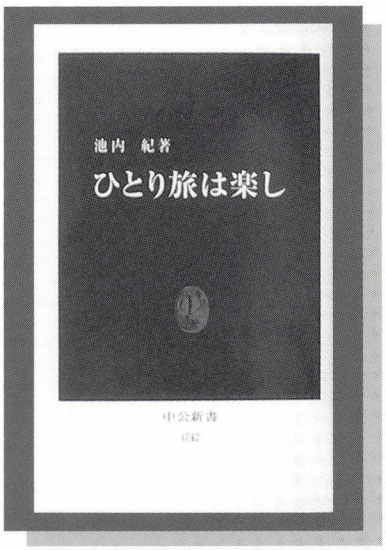
このレンガ壁は、余りにも火災が頻繁に起こるので、防火壁として明治末年に建てられたものである。実際に、昭和六年の火災では隣家まで焼失し、ライオンの家は壁によって類焼を免れている。

崩壊前の写真を見ると、壁の上部が三角形に見えるのは隣家の屋根の形で、細かく輪郭が取られている。このように屋根の形に合わせて建築されるものは非常に珍しいとされている。

厚さ三十センチ余りのレンガ壁が火災から守った建物は、高橋達太（本誌26号参照）が高橋回漕店の事務所として旧直江津銀行の建物を買収・移築したものである。

明治の珍しい銀行建築物だけではなく、レンガ壁も合わせて歴史遺産として補強・保存が望まれていた。

読書びと



ひとり旅は楽し

池内　紀著

中公新書
七二〇円（本体）

またもや揺れた大地震でその姿を一変させた柏崎の本町通りだが、かよったのは随分と以前になる。ショッピングモールに移る前の旧い呉服屋の蔵に展示してあった、南蛮物を始めとする川上澄生（かわかみすみお）の作品の数々。今はコレクションロードの美術館に移された花田屋の『黒船館』をたずね、隠居と渋茶を飲みながら作家の思い出話しを聞くのが楽しみだった。川上との所以を知らぬ細君の素直な質問に目を細めていた好々爺の声を思い出す。

二〇〇二年春号の『直江の津』に掲載された濱田研吾の「とんちん館感傷旅行」は、ドイツ文学者池内紀（いけうちおさむ）の柏崎への愛着を紹介した。池内は、唱歌による旅紀行と、幻想にも寓話とも読み取れる掌編で織り成された佳品『いまは山中いまは浜』（岩波書店・九八年）でも、友人の縁で毎年のように訪れたその町の「本町筋の寫眞館」や「番神堂」で出会う怪しの老人たちの姿を借りて、港町の文物にオマージュを捧げる。

わが池内紀は一九四〇年姫路市に生まれ、東京外国語大学を卒業して各大学で教鞭をとった。九六年に定年前で東大教授を退官、以後は洒脱なエッセイストとして、またNHKFM放送「日曜喫茶室」の常連客としてなど八面六臂に活躍する。天文学者、池内了は四歳年下の弟。

池内はアンソロジストとしても多くの本を世に送り、山の雑誌『アルプ』の名品群から『小さな桃源郷』（幻戯書房）を編み、岩本素白、早川良一郎らの埋もれた旧い随筆集を〈大人の本棚〉に甦らせ日の目を当てた。もちろんカフカ作品の編訳はドイツ文学者としての真面目といえる。共通するのは、対象へのさりげなくそして優しい眼差しである。それは自他を峻別し、五感を研ぎ澄ますことにより見えてくる「もう一つの人生のかたち」への敬意の表れである。偶然を必然とする出会いは池内の倫理が掴んだ。

二〇〇四年に上梓された『ひとり旅は楽し』は、池内ワールドを歩き始めるに格好の手引書であるといえる。さまざまな旅の想い出（天晴れ、とんちん館紀行も登場）を再録し、同時に自身の生き方、暮らし方のマニフェストとして、見事な中仕切りとなった。数多の自作を一人旅のテーマでアンソロジーに仕立て上げて見せたのだ。群れるを好まず、大型日本旅館と同窓会を苦手と公言するそのスタイルを、スノッブから昇華させているのは、心細さと日和見で出来そうで常に手が届かない〈ひとり旅〉を、軽やかに積み重ねたその先達ぶりにあるのだ。

そして歩みの時空は異にするが〈旅する巨人〉宮本常一の、在野をつらぬき人の心のうちに失われてはならぬもの、市井の暮らしと向き合い続けた視線と同様のものをつたえてくれる。

五十五歳でここを潮時と教職を離れ、身軽な〈自由人〉となった池内が綴る珠玉のエッセイ『遊園地の木馬』（みすず書房）に印象的な一節がある。友と山を歩き温泉で四方山話をする。現地集合、現地解散、めいめいの流儀で自分の場にもどる。そんなとき池内は必ず独りで見知らぬ駅へ降り立つ。「人生において、おどりあがりたいようなよろこびは一瞬のこと。考えてみると、ただその一瞬のために長い助走をしているようなものだ。」そのための一人旅。

遥かな山に憩いを求め、見知らぬ街の路地に新鮮な出会いを探す気持ちは日々高まるのに、塵労と怠惰に捕らまえられている。知への憧れと無限の好奇心を今ひとたびかき立てて、我が直江の津での暮らしに、自ずからなる行き方の本義を育まなければならぬ。

猛暑の夏も早や去りゆくことだろう。〈ひとり旅〉はさておき、細君を誘って、澄生の版画「日本越後國柏崎黒船館」の絵図を元に建てられた川上美術館を鹿沼へ訪ねてみようか。（寝）

建物さんぽ　その七

幸せの器と三つの対話

潟町から頸城にかけての道路沿いには、濃い緑の中に合歓（ねむ）の花の薄紅色がぽかりぽかりと浮かんでいます。猛暑の日照りなのに、そこだけ、そよ風がいるようにかすかにゆれながら。

初めて訪れた樹下美術館にも、その合歓の花をはじめ四季の草花の絵葉書がありました。館長の杉田さんの作品です。入念な観察と精緻な筆致からも医師としてのお人柄がしのばれますが、直接お話をうかがう機会に恵まれました。

ここは齋藤三郎の陶磁器と倉石隆の絵画・銅版画を展示する珠玉の美術館です。

齋藤さんの陶磁器は杉田家に幸福を届けてくれました。窯出しの日には、杉田さんのお父上がたくさんの作品を抱きかかえて戻り、―日頃は気難しいところのあった父が、包みを開いて見せるときには柔和な表情をたたえ、そして、家の中によろこびと温かさがあふれました―。以前、齋藤さんが昭和二十三年に築いた窯を訪れたとき、ご子息の尚明氏（二代陶齋）も同じように語られていました。「窯出しのときには皆が集まり、わいわいと賑やかだった」と。高田寺町の窯に集う人々の期待と窯の熱気が伝わるようです。その中に杉田さんのお父上もいらしたのでしょう。



その蒐集が美術館の礎になるのですが、ある日出遭った一枚の絵皿をきっかけに、美術館をつくろうと決意されたそうです。齋藤さんの生涯のモチーフとなった赤い椿を「結露霜為」の文字が取り囲んでいます。作者のおおらかな人柄が、厳しい鍛錬に培われた器を包み込んで、忘れがたい一枚となったのです。

ケース越しにも、作品は轆轤に向き合う陶芸家の手の動きや大きさを語り、コーヒーカップは日々の暮らしに映える用の美をたたえています。

倉石さんの人物画は背筋を正して見詰めました。黒い背景に浮かぶ裸体も白い身体を包む更紗のあざやかな色彩も、中途半端な視線では耐えられない力が漲っています。「そこから、描かれた人物との対話、描いた作者との対話、それを見詰める自分自身との対話が始まる」と、館長は語られました。画家とは遠縁にあたるということですが、人となりを知り理解を深めていく過程で絵画の素晴らしさを感じてこられたそうです。

緩やかな曲線に縁取られた木の床、白い壁に人物画が浮かび、見る者の心の揺らぎさえ映すようです。小さな美術館の醍醐味といってよいでしょう。物質として余分なものがないかわりに、豊かな空気と光が満ちています。作品にこめられた想いと建築家の造形の意図、それを具現した職人の丁寧な仕事が一つになり、ゆっくり鑑賞できる空間になりました。カフェの窓から見れば、野鳥が気ままに水浴びをしています。秋には草木の実を啄むのでしょう。小川の向こうに頸城平野の水田と丘陵のなだらかな線形を一望できます。

十五年近く前から、心のよりどころをこの地に定め、種を植え育んでこられたものが実を結ぶようです。「樹下」という名前にも、何か大きな存在に包まれて見守られているような気持ちになりました。



齋藤三郎（一九一三～一九八一年・　初代陶齋）／倉石　隆（一九一六～一九九六年）
樹下美術館　頸城区城野腰四五一番地　☎〇二五（五三〇）四一五五　十時～十六時（火・水曜日　休館）
文　せきゆうこ／画　ひぐちきみよ

上越信用金庫　上越産業振興研究所レポート

「使い勝手の良いまち」づくり　わがまちにＬＲＴを

佐藤和夫 研究員

北陸新幹線の開業を目前にして、経営分離（民営化）される在来線の行方について、存廃さまざまな議論がなされています。

このような在来線の将来について、大きなヒントを与えるものとして注目を浴びている「ポートラム」に乗ってみました。

■富山港線から　ポートラムへ

「ポートラム」とは、富山駅と岩瀬浜駅を結ぶライトレール富山港線の愛称で、ＪＲ西日本鉄道の富山港線が民営化されたものです。

富山港線は、北陸新幹線の高架工事に伴って、高架で富山駅に乗り入れる必要に迫られました。しかし、高架工事による長期間の運休と工事のコストを理由に切り捨て廃線の危機に瀕していました。

富山港線廃止を憂慮した「公共交通をよくする富山の会」が存続運動を起こしました。これを受けて、富山市・富山商工会議所・富山第一銀行・北陸銀行・日本海ガス・北陸電力・富山地方鉄道・インテック（ＩＴ関連企業）が発起人となり、ＪＲから経営を引き継ぐ第三セクターの会社「富山ライトレール株式会社」を平成十五年に設立しました。

そして平成十八年四月、富山港線は路線名を「富山ライトレール富山港線」と改められ、公募で「ポートラム」（Ｐｏｒｔ＝港とＴｒａｍ＝路面電車の造語）という愛称が付けられて開業しました。

運営は、富山市が施設の維持管理、富山ライトレール㈱が運行を行う「公設民営」方式を採用しています。



富山駅北口の路面を走るポートラム

■ライトレール化へ

ライトレール化の工事は、全長八キロの富山港線のうち、高架工事が必要だった一・五キロを廃止、途中から路線を切り替えて一・一キロに併用軌道（道路上の軌道／路面電車）を新設、六・五キロは富山港線の線路をそのまま利用するというものです。ＪＲ富山駅北口に「富山駅北」駅を新設して始発駅にしました。

長い運行間隔を十～十五分間隔にして本数を大幅に増やし、駅は約五～六百メートル間隔で五駅から十三に増設し、同時に低床車両の導入でホームの低床化工事も行いました。これらの工事には、併用軌道区間に十五億五千万円、鉄道区間で二十四億円を投じています。

車両は常に二両編成で運行される「二車体連節低床式路面電車」というもので、開業に合わせて七編成が導入されました。車体は立

山の新雪をイメージした白を基調に、フロントと乗降口が編成ごとに七色に分けられていて、新潟トランシス（新潟鉄工所）で、十八億五千万円をかけて製造されました。

ライトレールとは

最近よく耳にするライトレールとは、Light・Rail・Transitのことで、「軽量軌道交通」と訳されて、通常ＬＲＴと標記されます。

ＬＲＴの日本での定義は必ずしも明確ではありませんが、遠距離の都市間を走る大型車両を用いるHeavy・Rail（本格的鉄道）に対して、都市内やその近郊を結ぶために運行される一、二両編成の軽量な車両（ＬＲＶ＝ライトレール・ビークル）により、大部分を専用の軌道（一部路面を走る併用軌道も可）を走行する交通システムのことを言います。

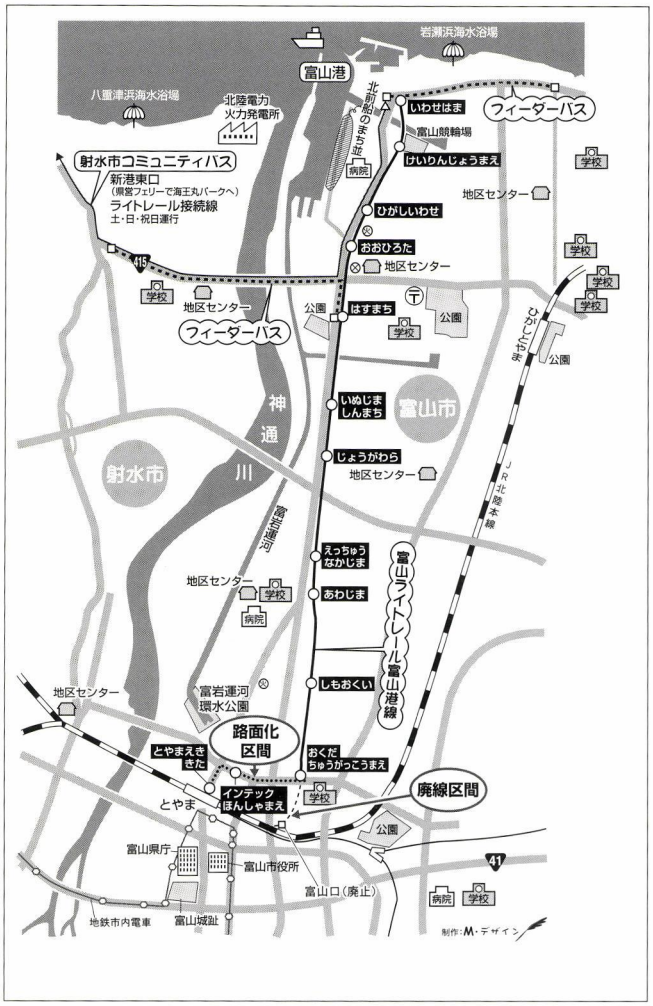
ＬＲＴは、次世代型路面電車と解説されたり、低床の路面電車のことと思われがちですが、実際には都市計画や地域計画の中で、都市交通手段としての明確な位置づけと、誰でも簡単に利用できるという利便性が要求され、定時運行、プリペイドカードなどの導入による運賃精算の簡略化、他の交通機関との連携が求められます。

ＬＲＶを導入しても右の要件を満たさなければＬＲＴとは呼べないと言われています。一方で、長野電鉄のように長野市の都市計画の中に位置づけられていれば、本格的な鉄道であってもＬＲＴと呼んでもよいと解釈されています。

ポートラムに乗ってみて

「富山駅北」駅は簡単な屋根の駅舎と、道路面とほとんど同じ高さのホームが一本あるだけです。周囲の景観に吸い込まれるようにマッチした駅舎に、まるでヨーロッパの市電

ポートラム路線図





「富山駅北」に進入するポートラム
バリアフリーで乗り降りも楽

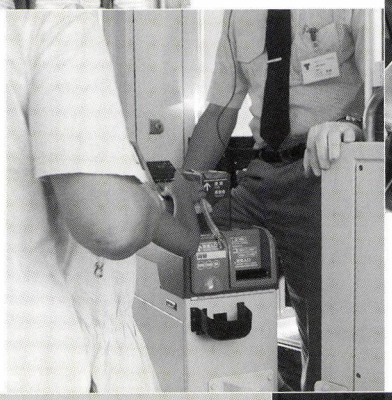


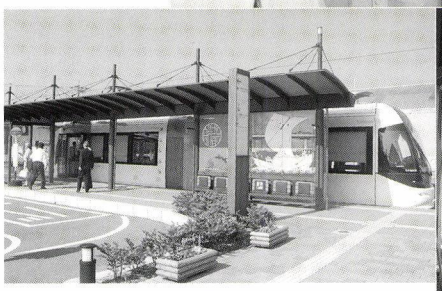


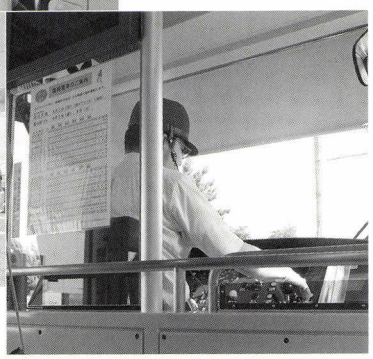
快適な車内



カードリーダーで子どもも安心して乗れる







上　岩瀬駅
右　シンプルな運転席

のようなスマートな電車が入ってくると、観光で来ていた人たちから、思わず「わーっ」という歓声があがりました。路面の部分ではほとんど走行音はありませんが、旧線に入ると独特の鉄道の走行音になります。

乗客はワンマンバスと同じようにブザーで降車を知らせ、大人二〇〇円、小人一〇〇円の現金か、パスカというプリペイドカードをカードリーダにタッチして降ります。

単線のため、すれ違い駅では上りと下りホームが少しずらして設置されています。これは踏切での車の待ち時間を少しでも短縮しようというアイデアです。

駅舎の風防パネルは企業の提供、ホームのはね上げ式のイスは個人の寄付で、地域総参加の鉄道という気持ちがひしひしと伝わってきます。

魅力的な電車に変身したポートラムは、地域の自慢の一つになっているようです。同乗している地元の人がガイドに変身して、沿線の観光ガイドつきでポートラムの説明をしてくれることもあります。

乗車時間わずか三十分ほどですが、最高時速が路面で四〇キロ、鉄道部分は六〇キロという、ゆったりとしたスピード感と、座り心地の良い座席で快適な「旅気分」にさせてくれます。

乗客は

沿線は田園の中に広がる住宅地という印象ですが、近くに三つの高校と富山競輪場（JR時代は開催日のみ競輪場前駅で停車）があります。それでもJR時代には乗降客が一日平均千六百人程度で、開業しても乗客増は見込めず、赤字は避けられないと思われていました。ところが開業してみると、毎日五千人近い人が乗り降りし、一年目で黒字になってしまいました。

これにはLRTをシステムとして機能させる必須要件の一つ、フィーダーバス（支線バス）と呼ばれる小型バスが駅からさらに細かく運行され、沿線意識の「幅」を広げていることがあげられます。

乗降客増加は、このようなハード面だけではなく、路線を確保させた地域運動の力が大いにあると思います。「ポートラムは地域の足」という意識を生んでいるのではないでしょうか。

富山の駅南の市街地を走る地鉄の路面電車との接続も提案されているようで、地域の足としての充実が期待されています。

観光として

ポートラムそのものが観光としての魅力を十分に備え、富山観光の目玉の一つになりつつありますが、終点の岩瀬は北前船の寄港地で、北前船の家の公開や町並の散策、展望台からは富山港、神通川、北アルプスを一望のもとにできます。しろえび料理で有名な料亭もあり、一層の集客が見込まれています。



落着いた雰囲気の料亭





公開されている北前船の豪商の家



上　楽しい意匠をこらした風防パネル



左　イスに寄贈者のプレートがはめ込まれている

また、富山新港の越ノ潟をフェリー（無料）で渡り、海王丸を見学、新湊から万葉線（ＡＩ・ＴＲＡＭ＝あい・トラム）で高岡へ、そしてＪＲで富山へ帰るという回遊コースが、新たな観光ルートとして注目されています。

パスカ　ＩＣパスカード、パスカはカードリーダーにタッチするだけで運賃の精算ができ、プリペドカードとしても定期券としても、同じカードで金額の積み増しや更新ができる。

65歳以上の人には料金半額のシルバーパスカがある。

パスカは市内の数十の加盟店で、宿泊割引やレストランの割引が受けられるなど、色々な特典がある。



時刻表やパスカのマニュアル、サービス加盟店などが載るガイドブック

フィーダーバス　ポートラムに接続するバスで、平日30分間隔、休日朝30分間隔、日中１時間間隔で運行。大人200円、こども100円、シルバーパスカ100円、ポートラム乗り継ぎは半額。



岩瀬の物産センターでは、七色のネクタイやポートラムミニカーなどの「ポートラムグッズ」が売られている



本町通から見る別院大門通

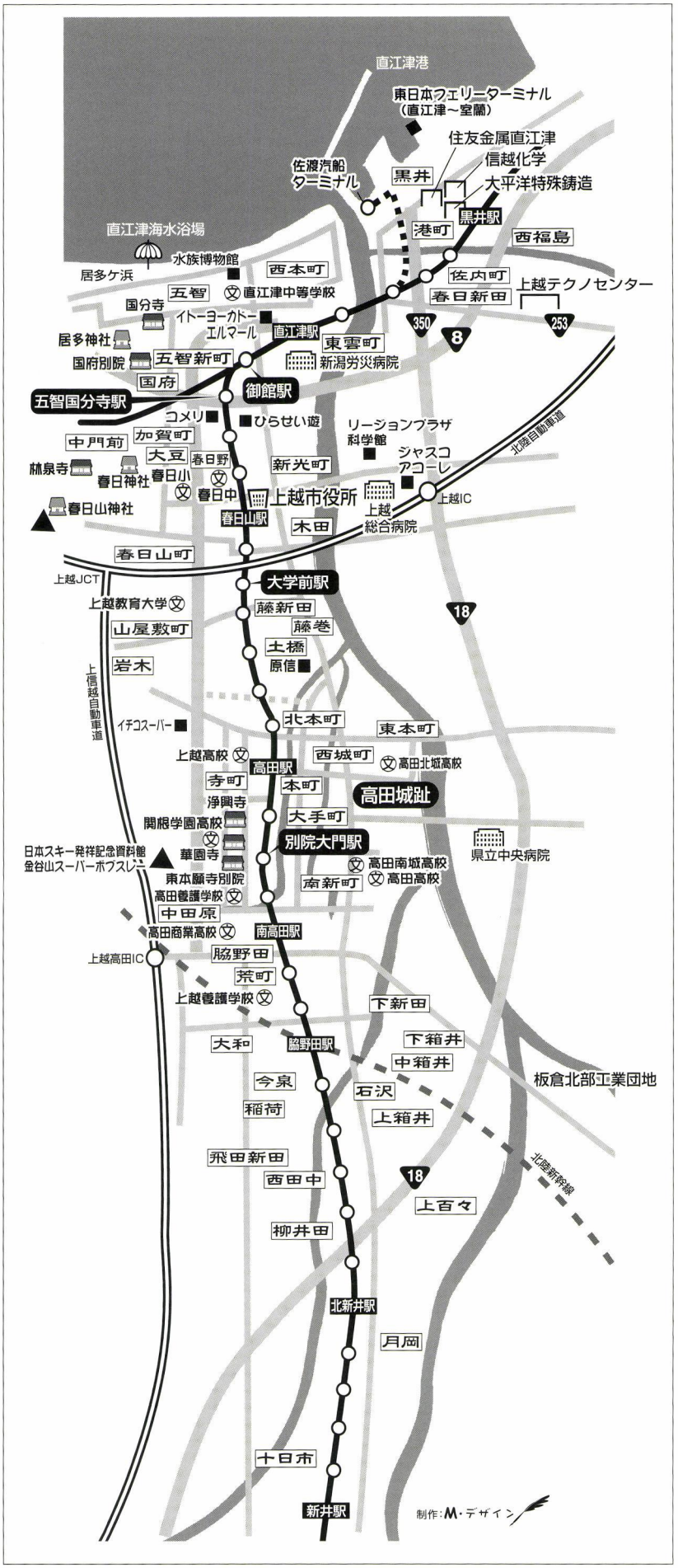
■わがまちに　ライトレールを

上越市の地図を広げ、試みにＪＲ信越線の黒井駅から新井駅間の約十七・五キロを五百メートル間隔で区切って駅を設置すると、三六の駅が生れます。高田・直江津間で十三、高田地区では北本町から南高田駅間で七つの駅ができます。この間を十から十五分間隔で電車が走ると想像したらどうでしょうか。

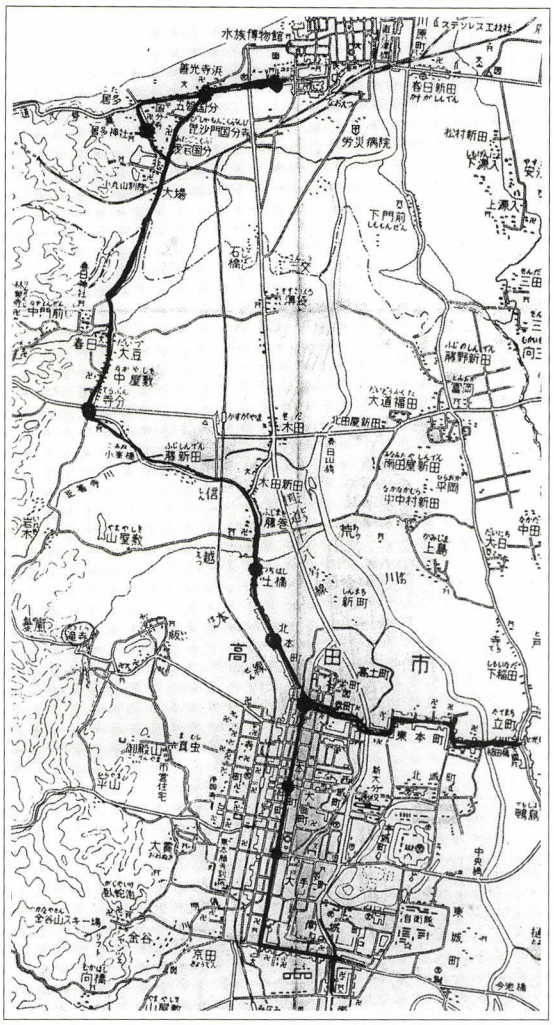
高田別院前駅で下車すると、高田高校へ一キロ、関根学園は六百メートル、その先には金谷山も見えます。仲町駅で乗れば飲酒運転の心配もありません。

春日山駅から春日山城跡まで二キロ、上越総合病院までは二・五キロ、ショッピング街も含めて百円均一のフィーダーバスの運行が考えられます。上越文化会館へのアクセスも大変便利になります。

大学前駅から上教大の正面まで一キロ足ら



明治時代に考えられた電気鉄道



左の図は明治40年に金子伊太郎等によって設立された「上越電気鉄道㈱」によって計画された路線を推定で地図上に示したものである。

幹線は第四銀行付近を始発に本町通を北進、（本町七から東本町を稲田橋まで支線）北本町から加賀街道を進み国府別院の先で国分寺と浜善光寺方面へ分岐、浜善光寺前で合流して八幡、直江津砂山停車場（位置不明）、直江津港。また、始発駅から南進して伊勢町口まで支線を敷設する。当然実現しなかったが、あったらと夢が膨らむ。（「『高田適誌』より）

信越線の向こうに見えるのは上越教育大学



ず、直江津駅から一つ目の御館駅で降りると、親鸞聖人の旧跡や五智国分寺周辺は一キロ圏内になります。二つ目の五智国分寺駅でもかまいません。御館駅からエルマールまで約三百メートル。

春日新田から路面電車で佐渡汽船乗り場へということも考えられます。

このように、駅の間隔と運転間隔の短さが、目的地へ直行する交通手段から、途中下車が自由な交通機関となり、地域間の人の流れに大幅な変化が起こり、商業集積地域の劇的な移動が予測されます。

また、ほくほく線・北陸線の相互乗り入れはもとより、ライトレール化を含めた連携で、北陸新幹線を降りて旧来の鉄道、あるいはバスで目的地へ直行するのではなく、途中下車によって旅行者の足を止めさせる有効な手段となり得ると考えられます。

■「歩いて暮らせるまち」コンパクトシティ

高齢社会を迎えつつある今、持続可能な都市「コンパクトシティ」を目指す上で、都市計画のなかで位置づけられる駅、つまりＬＲＴがはたす機能が重要なポイントになることは間違いありません。また、上越市街は富山市街の一・六倍も平均積雪量があり、積雪期を考えると、交通手段の確保という観点からもＬＲＴの機能が必要になってきます。

駅を核に商業地域や住宅街、公共施設が置かれた「歩いて暮らせるまち」こそ、これから（再び）求められる「まち」のあり方ではないでしょうか。

本レポートは、沿線の人口動態、有効宅地面積、商業集積可能な土地、山麓線・上越大通り・各国道との連携、信越線のＬＲＴ化（低床車両の導入も含む）などについて、具体的な試算は一つもしていません。

しかし、脱車社会によるCO^2の削減など、環境問題も含め、さらには「夢」も含めて、真剣に取り組むべき課題ではないでしょうか。



春日山駅から望む春日山城跡

アルバムの一枚

赤道を往復した〝みずあめ〟

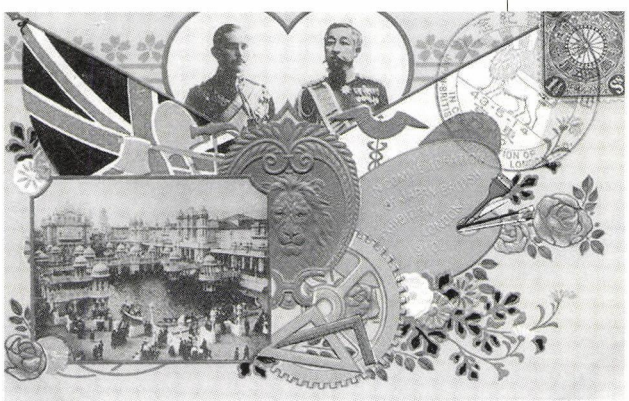
写真のガラスビンは、明治四三年（一九一〇）五月から開催された日英博覧会に出品された粟飴です。

明治三五年（一九〇二）、日英同盟が締結されました。第二次、第三次と改訂され、第一次世界大戦後破棄されました。

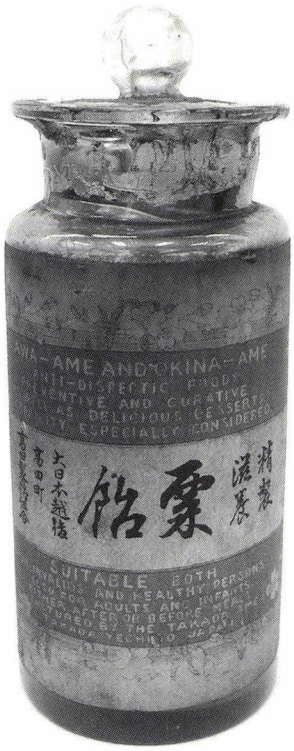
この博覧会は、日英同盟の第二次改定を記念して、伏見宮貞愛親王を日本側の名誉総裁に、日英同盟記念親善博覧会として開催されました。

ジャパンビューティフルのテーマのもと、富士山のジオラマを前に三十メートルもある鎌倉大仏が再現され、観客を驚かせたといいます。また、多くの美術品、工芸品が出品されるなかで、小林古径の名画「加賀鳶」も海を渡りました。

ラベルには「高田製飴組合」とありますので、上越の製飴業者の組合で、共同で出品したものと思われます。金牌（賞）を受賞しています。



博覧会を記念して発売された絵葉書



赤道を往復した粟飴は、直江津駅前の斎京商店に今も大切に保管されている

AWA-AME AND OKINA-AME,
ANTI-DISPEPTIC FOODS,
PREVENTIVE AND CURATIVE
AS WELL AS DELICIOUS DESSAERTS,
DURABILITY ESPECIALLY CONSIDERED.

SUITABLE BOTH
FOR INVALIDS AND HEALTHY PERSONS,
ALSO FOR ADULTS AND INFANTS,
EITHER AFTER OR BEFORE MEALS.
MANUFACTURED BY THE TAKADA AME CO.
TAKADA YECHIGO JAPAN

粟飴と翁飴
消化を助ける効果がある食べ物で、病気の治療および予防効果もあります。デザートのように美味しく、長期保存ができるように、特別に考案された食べ物です。
病弱な人、健康な人にも、また大人から幼児にも、どなたにも合います。
食前でも食後でも結構です。

製造　高田製飴組合
大日本越後　高田町

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

■編集室から■

今回の号は、期せずして二つの交通機関がテーマとして採り上げられた。「全ての道はローマに通ずる」というのは、日本も同じことで、律令制度の確立のために古代から官営の道が整備されていた。本来、道（交通機関）は公（おおやけ）であり、私（わたくし）すべきものではない。経済原理ばかり働くと、遠くへの移動は便利になっても、すぐそこへ行くのが大変不便になる。

「根曲がり杉」の撮影でお世話になった中島さんの今清水は初めて訪れた集落だが、不思議な静けさが漂う隠里のようであった。ここも上越市なのだ。

第7巻4号　12月1日　発行予定

年間定期購読（4冊1920円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

季刊「直江の津」秋号
第七巻三号　通巻二十七号
発行日／平成十九年九月一日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二－一－八
上越信栄社内
☎〇二五(五四五)〇二〇二
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／(有)北越出版
責任者　佐藤和夫

内容・投稿などの問合せ先
北越出版
上越市国府三－九－五
〒九四三－〇〇八二
TEL〇二五(五四三)九七一五
FAX〇二五(五四三)二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊

直江の津

発行／平成十九年九月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／(有)北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／(株)桐朋・太田均

頒布価格／三〇〇円(送料一八〇円)